

研究課題：泉鏡花の周辺人物の研究―「桃山御殿」売却に関する調査を通して―

本研究は、石川県金沢市出身の小説家・泉鏡花の周辺人物である藤谷外茂吉について調査を行うことを目的としたものである。藤谷外茂吉は、2歳年長の幼なじみで鏡花の思慕の対象であったと知られる湯浅しげの夫である。鏡花作品の重要な主題の一つとして知られる人妻に対する思慕は、この湯浅しげに対する思慕が深く関わるという指摘がある。湯浅しげや藤谷外茂吉の生涯については、先行研究において詳述が試みられてきた。しかしながら拙稿「泉鏡花『飛剣幻なり』試論——同時代の話題の撰取についての検討を通して——」（2023年6月）で『飛剣幻なり』を論ずるにあたり、藤谷外茂吉、とくに彼が住まいとした「桃山御殿」に関しては、いまだ明らかになっていない点があることに気が付かされた。

この問題の背景の一つとして、藤谷家関係の資料には従来閲覧困難なものがあったことが考えられる。本研究では金沢市立玉川図書館で近年閲覧可能になった藤谷家関連資料に加え、郷土資料や金沢地方法務局所蔵の旧土地台帳等を広く調査することにより、藤谷外茂吉、とくに藤谷家没落の経緯とその象徴ともいえる「桃山御殿」売却の詳細やその後を詳らかにすることを目指した。

金沢市立玉川図書館所蔵資料の調査において、新保千代子論（「しげ女余談」、平成元年3月）が藤谷外茂吉について述べるにあたり依拠した手稿『別家記録』の複写資料を確認した。本資料は個人所有であったため従来閲覧が困難な状況にあり、「現在も公にされていない」と小林輝治論（「湯浅しげ」再考、平成19年3月）で指摘されていたが、現在、複写資料が閲覧可能である。今回の調査により、『別家記録』には新保論が引用していない、藤谷外茂吉に関する記述があることを確認できた。また『別家記録』では、明治23年から明治34年までの藤谷家の動向が不明である。玉川図書館所蔵の藤谷家関連資料により、明治33年時点の藤谷家の経済事情等が確認できた。

また旧土地台帳の調査により、「桃山御殿」所有権移転の詳細を確認できた。本邸宅は明治34年12月16日、木谷藤右衛門所有となったのち、所有権が木谷きつ、野口喜一郎、金澤土地建物株式会社に移転している。

この「桃山御殿」が焼失した彦三の大火（昭和2年）において、同じ町内に奇跡的に焼け残った別荘があったという新聞報道（「北國新聞」昭和2年4月27日、朝刊、第5面）が存在する。記事に拠れば、別荘が焼け残ったのは飾られていた軸と、「御本尊」で「生きた女神」たる妾がいたからだ、当地では評判になったという。拙稿（前出）では、この巷説が『飛剣幻なり』の趣向に影響を与えた可能性があると指摘を行った。今回の調査では、この別荘の住所をはじめとした詳細を明らかにすることができた。別荘の当時の所有者は井上照という女性である。彼女が世話になっていた、前出の新聞記事で「セメント屋さん」として紹介されていた人物は、金沢出身の文人として名高く、鏡花と親交があったことでも知られる細野燕台である。当時の正確な番地が確認できる地図は確認できていないものの、法務局に旧土地台帳とともに所蔵されていた地図などの調査から、この別荘のおおよその位置も判明した。

燕台は篆書家として著名であり、その書は「火除けのお守り」として人気があった。これは彦三の大火、昭和5年の山中温泉の火事の二度において、燕台の書を飾った建物が焼け残ったためであるという。今回の調査により、燕台の別荘や書にまつわる巷説は、当地においてはかなり知られていたことが確認できた。関係者が鏡花の知人であったことも加味すると、鏡花が焼け残った別荘の巷説を『飛剣幻なり』に取り入れたのではないかとこの拙稿（前出）での推測の妥当性が高まったと考える。